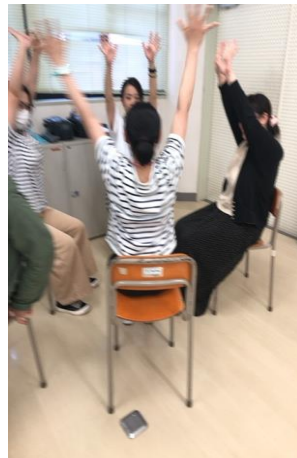


2019年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2020/9/30

団体名		NPO法人フリースクール地球子屋	活動タイトル	不登校児の早期発見と総合的な支援による地域連携試行事業		
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）				■ 活動風景		
● 地域の望ましい社会状況(ビジョン)		この30年間に以上にわたり不登校児の割合は日本全体で増加し続けており、熊本県内においても同様の傾向である。この背景には発達特性など多様な子どもの増加等はあるが、不登校を問題視する社会（教育委員会、家族、地域）や不登校に関する偏見が根強く残っていることや多忙すぎる教員、様々な保護者要望への対応、不登校対策として子どもの現状を無視したマニュアル的な対応など教育現場にも問題がある。 不登校とは学校に所属しているから「学校に行っていない」状態を表現する言葉にすぎず、子どもの視点に立って考えれば、まず子どもの人権・福祉が保障（生存・保護・育成・参加）された上で、グローバル社会に適応する多様な教育を自ら選択できる環境となることが一人ひとりの子どもにとって望ましい。当法人が目指すビジョンは、本当に一人ひとりの子どもの能力が伸びて社会へとつながるための環境を実現することである。		メンターの不登校生とのコミュニケーションワークショップ		
● 団体の社会的役割（ミッション）		学校種や年齢による制度の切れ目で苦しむ子どもに対して当法人は、先生・友人・家族に理解されず命を絶つ子どもを早期発見したい。そのため1996年設立以来、子どもの人権を重視し保護者・子どもが主体となった居場所・学び場提供に行ってきた。 2019年以降は、単に居場所・学びの場所の提供ということではなく、子どもの命を守り長期的に支援する包括的なケア体制の中に子どもの教育選択を位置づけた子どもの福祉と教育を融合した事業を展開する。県内唯一の総合的な不登校ひきこもり支援専門団体として先駆的な取組をしていくことが使命である。				
● 団体の活動基盤		1)人材育成 当法人は不登校・ひきこもりのご家族が会員である。子どもの第一の支援者は家族であるため、まずご家族に不登校という現象や子どもの発達に関する理解を深め、子どもへの対応力を高めてもらうように「不登校学習会」「ともに育つ親の会」を行っている。次に家族ではケアが難しい平日昼間の子どもへの支援に当法人スタッフがあたることになるため、スタッフ育成講座を通してスタッフ育成をしていく。 2) リソースの確保 相談・カウンセリングや子どもの健康回復と学習支援の場として子飼商店街の自然食品店「天粧」と協働関係で場所を確保している。人的リソースには福祉専門職や教育専門家などと連携し子ども主体の活動を実現している。 3) 活動資金 会員会費、活動費（事業収入）、寄付金、助成金が主たる収入源であるが多様な資金源とするため、テキストや会報誌など有償頒布や企業との若者退職予防研修協働プログラムなどを提案予定。 4) ナレッジ 不登校問題は、健康科学、認知行動療法や家族関係療法など心理療法、脳・発達障がいへの対応方法、育児・子育て法、参加型教育方法、コーチング・ファシリテーションの技術、カウンセリング技法、SSTなど様々な知見・技能を当法人は有している。				
■ 活動報告				■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)		
不登校支援には専門機関の適切な支援が必要である。本事業では、不登校を「初期(総欠席30日未満)」「中長期（中期は総欠席日数30日以上、不登校期間6か月以上1年未満、長期は総欠席日数30日以上、不登校期間が1年以上）」期間に分け、初期アセスメントシートと10段階モデル評価シートを開発し、子どもの総合的な実態がわかる相談を展開した。 初期不登校生は少人数ワークショップ型の相談体験をすることで相談する力をつけ、学校外の居場所を見つけることができた。中長期不登校生は、10段階モデル評価をし自分ができる力がある事と今後の課題を明確にし小目標をもつことを勧める事で意欲を回復させていった。教育委員会や病院と連携を強め、出席扱いが認められるなど社会的な変化を生み出す事もでき、紹介による初期相談にもつながった。子どもに近い年齢のメンタースタッフを養成することで相談しやすい環境となった。以上のような包括的な不登校支援体制が強化され不登校支援のモデルができた。				初期不登校の子どもを対象とした総合的な不登校支援環境づくりでは、初期不登校アセスメントシートを開発し、実際に111人の子どもについて評価ができた。現状を子ども、保護者、当法人が共通理解することで次に何をすべきか目標も明確になること、そして保護者が現状を把握できたことによる安心感が生まれるなど効果的であった。メンタースタッフを養成し、コミュニケーションワークショップを少人数で実施できた。年齢が近い人とリラックスした中で取り組むことで本音に近い気持ちを引き出すことができた。 中長期不登校生については、10段階モデル評価シートを開発し、延べ49人に行った。自分の今できる力と今後の課題がわかり小目標をもつことができた。学力以外の非認知能力（健康面、ストレス対応、対人関係、学力、自己理解）について課題意識をもつことが意欲につながる面があることが確認された。教育委員会や病院との連携が構築され当法人への相談につながることができた。		
■ 事業を通じて得られたノウハウ				■ 望ましい社会状況を達成するための課題		
●保護者対象とした不登校学習会において、不登校の子ども理解のための地球子屋流子育て術5段階20ステップ（不登校学習会テキスト）を作成し不登校の考え方、対応方法の共有や各家庭でワークシートを活用し子どもの状態把握に活用された。 ●不登校初期相談（訪問相談含む）時に子どもの状態をすぐにその場で把握するために初期不登校アセスメントシートを活用し、ご家族と共有することができた。 ●不登校中長期の子どもについて支援を行い、保護者とその経過を相談するために、中長期不登校生のための10段階モデル評価シートを活用し、次の目標を共有することができた。 ●メンタースタッフがコミュニケーションワークショップ（アイスブレイク、気持ちメーター、他者が嫌になるコミュニケーション分類、気持ちを表すいろいろな方法、大丈夫を感じる）を実施するにあたり目的や進め方について身につけることができた。 ●不登校の子どもに対応するスタッフが日々の子どもへの対応についてスタッフ養成プログラム（不登校の子どもも理解、子どもとのコミュニケーション法、相談スキル、不登校の子どもへの対応方法、ワークショップ理解）を理解し対応方法のスキルが上がった。				不登校の子どもは、自分以外の他者の言動に傷つき・不信感・ストレスを抱え、また自身の自尊感情・自信・存在意義を見失い自らを責めることを繰り返す。本来、子どもを支える家族が学校復帰のみを目的としてしまうことで子どもは脅威を抱くため、不登校支援は、現実的には保護者支援であり専門機関と保護者が早くつながることができることが鍵となる。 望ましい社会状況（ビジョン）としては、保護者の支援に加えて子ども自身とそのご家族が多様な教育の選択ができる社会へと移行することが課題である。実現するためには、子ども、保護者が学校、学校外教育施設をどのような基準で選択すればよいのか、その支援も急務である。どの機関で教育を受けるか、その判断ができるようになるために子どもを学力のみならず総合的、包括的な視点で現状を把握していく必要性がより一層求められる。		
■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）				この1年間の活動を通じて		
				「初期」「中長期」それぞれの不登校の子どもへの支援の方法とその体制づくり		
■ 受益者の具体的な変化（効果測定結果等）				を達成しました。		
				保護者が不登校に対する理解を深めることで、子どもに変化が現れて一部の子どもは学校への復帰もできた。必ずしも復帰がゴールではなく小さな目標をもち達成を繰り返すことで子どもが自ら選択する力を身につけることができた。		